

近現代アジアにおける非木材林産物を含めた森林の持続可能性

—インドと日本を結ぶ—

大石 高志 (国際関係学科・教員)



はじめに

戦前の日本からインドへの輸出品とその社会・文化・政治的文脈に関して、筆者は、直近では、傘の柄について探求している(大石 2024)。そのなかで、木工の傘柄が遠く2つの国を跨いで流通した基底的背景として、非木材林産物を含めて、両地域における森林と林産資源の利用をめぐる歴史的な相違性が重要であることを確認した。本稿では、この点を俯瞰する。

ウシの放牧と放浪: 政府の官有森林域への侵入問題

インドのウシの「放浪」には 2 種類あると言えよう。1つは、都市部を含めて見られるもので、一部の文化・政治団体が、ヒンドゥー教でウシを神聖視する観点から、農耕や酪農での有用性が低下した牛も含めて、屠殺処理を阻み、放し飼いや養老院での庇護に及んでいるものだ。こうしたウシの「保護」は、交通上の危険性も生むが、それ以上に、優れて政治的な争点となっている(大石 2006)。もう 1 つは、山間地も含めて広く見られるもので、林野地に十分にアクセスできないウシが移動・放浪して、人間の日常生活圏の路面を含めて行き交ったり(写真1)、政府の保有・管轄する森林・丘陵地に入り込んで取り締まりや罰則適用の対象となったりしてきた事象である。



写真1: インド山間・丘陵地での牛の放し飼い(大石撮影)

イギリス植民地期インドの「森林保護」: 在地住民の疎外

英領植民地インドの 1878 年にインド森林法が施行されて、政府の保有・管轄する「保留林」などが規定され、森林の「保護」が謳われた。しかし、学術研究の蓄積は、この法制措置が、鉄道敷設の枕木に適したサラソウジュや船舶建造などのためのチーク材など、特定の大型樹種の木材資源を守ることであり、結果的に、森林から近隣の住民を追い出し、薪や牧草などの便益を奪ったことを指摘してきた。事実上、在地住民は、森林

の「柵外」に追われた(Rangarajan 1999; 水野 2016)。20 世紀に入っても林野面積は全体の 3 割確保されていたが、民間林地は、その中の 3 割に留まり、残りの 6 割近くが官有だった。

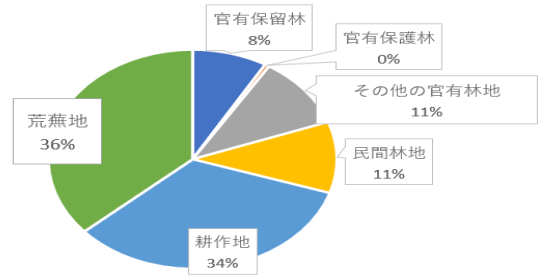


図1: 英領インド(1929年)の面積配分: (GOI 1930)で算出

森林と国家の比較史

英領インド政府による森林の直接支配と木材資源の集中的利用は、植民地主義や木材資源の減少・偏在に起因していた。主に 1920 年代末での欧州諸国の森林分布の状況を見る。

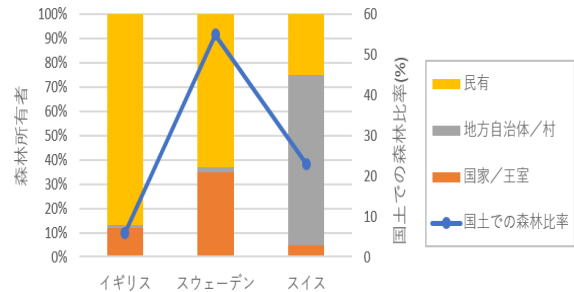


図2: 森林の所有形態: 国際比較: (Troup 1938)より整理

イギリスは森林面積比率が 10%を切り、その欠乏が顕著だった。また各国での森林所有形態は王室や国家、地方自治体など、大きく異なっていたが、イギリスでは、国家/王室の所有比率は 10%程度と全く高くなかった。つまり、イギリスは本国での森林/木材の欠乏を植民地インドで補填し、その際、植民地国家による大々的な森林所有・管轄という措置に新たに踏みきっていた。

ガンディーと「フォレスト・サティアグラハ」(森林での真理獲得)

森林の「柵外」への締め出しに、インドの人々が為す術が無かったわけではない。むしろ、多くの農民や丘陵地民は、一時入域許可の代金を支払って、あるいは、逮捕を覚悟のうえ無断で、官有林に入域して牧草や薪などを採集し、静かに抵抗した

(Kumar 2015)。こうした抵抗は、1930年頃、植民地主義の「不道徳」に対する非暴力での挑戦を説く M.K.ガンディーの市民的不服従運動と共鳴して高揚を見せ、「フォレスト・サティアグラハ」(森林での真理獲得)とも称せられた(Baker, 1984)。

ビーリー(ビーディー)の台頭とナショナリズム

インドの森林資源をめぐるのは、ナショナリズムと結び付いて20世紀に入って、1つの顕著な動きがあった。特に中央部インドの森林に自生するテンドゥという樹の葉で刻みタバコを巻いたインド独自の安価なシガレットのビーリーが、中下層を中心に急速に普及した。インド人エリート層の欧化的な嗜好を揶揄するサバルタン(従属的社会集団性)なナショナリズムの発現を、1つの森林資源が媒介したことになる(大石 2016)。



写真3: ビーリー(左)とテンドゥ葉採集地(右) (大石撮影)

日本における林産物活用とその包括性

日本は国土の6割を森林が占め、その上で、国家など官有の林野が抑制され、私有の山林も豊富に存在した(図3)。

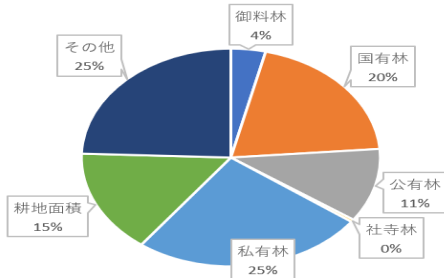


図3: 土地面積配分 1930年(農林大臣官房統計課 1931)

また、日本の山林では、江戸時代に遡って、幕府・藩に民間の林業家も加わり、市場志向型の育成林業も相俟った森林の維持・管理が進展し、人口増加にも対応していた(斎藤 2014)。



写真4: 奈良県川上村の樽丸製造: 春増薫氏 (大石撮影)

また、そこでは、趣向や工夫を凝らした森林資源の包括的利用が機能した。近畿一円の森林は、木地師の歴史的伝統が濃く、諸処の木工品を深山から生み出した。吉野では、都市圏向けの大量の建材だけでなく、日本酒の樽の側板(樽丸)、さらにその杉の端材を活用した割箸が製造されたのである(写真4)。

おわりに

戦前の日本からインドに輸出された傘柄は、杉や檜などの植林針葉樹やブナなど広葉樹を広く活用していた。つまり、前提として、山林資源の豊かさや多様性、資源の包括的活用性を指摘できる。それは、英領インドとは異なっていた。現在、戦後日本での針葉樹への強い傾斜を回顧的に修整して、広葉樹の回復を目指しながら森林の持続可能性や多様性を見据える新しい試みの胎動があることも、留意しておきたい(写真5)。



写真5: 三重県の叶林業合名会社の針広混交林 (大石撮影)

主要な参照・参考文献

- 大石高志 2006 「繋がり、広がり、逸脱: インドにおけるムスリム皮革・食肉商工業者のネットワークとその恣意的読み替え」『現代思想』(「イスラームと世界: 衝突か抵抗か」)34(6)
- 大石高志 2016 「近現代インドにおけるビーディー: 歴史と文化」たばこ総合研究センターTASC『助成研究報告書(H27)』
- 大石高志 2024 「戦前の近畿地方の山林とインドでの洋傘の製造・流通業: 木材資源の活用と市場との接合」(報告)社会経済史学会 93 回全国大会、東京都立大学、2024年5月
- 斎藤修 2014 『環境の経済史: 森林・市場・国家』農林大臣官房統計課編 1931『農林省統計表 第7次』
- 水野祥子 2006 『イギリス帝国からみる環境史: インド支配と森林保護』
- Baker, David 1984, "A Serious Time': Forest Satyagraha in Madhya Pradesh, 1930," *The Indian Economic and Social History Review*, 21(1)
- GOI(Govt. of India), 1930, *Statistical Abstract for British India 1929-30*.
- Kumar, V.M. Ravi 2015, "Contested Commons: History of Colonial Grazing Policy in South India (Andhra), 1890-1930" *International Journal of Social Science*, 4(1).
- Rangarajan, M. 1999, *Fencing the Forest: Conservation and Ecological Change in India's Central Provinces 1860-1914*.
- Troup, Robert Scott 1938, *Forestry and State Control*.